

あんこで町の魅力再発掘 「剣淵あんこフェスティバル」

剣淵町地域おこし協力隊 青木純香

そろそろ初雪も降りそうな2018年の秋の終わりの10月27日、人口約3,100人の北海道にある剣淵町で、あんこをテーマにした「剣淵あんこフェスティバル」が開催されました。雪こそ降らなかったものの当日は強い雨が打ちつける生憎の天気でしたが、それでもおよそ650人もの来場者が訪れ賑わいを見せました。

あんこ好きなお客さんたちを呼び寄せたのは、なんと言ってもあんこのお菓子たち。町内外から集まった9つの店が売り出すあんぱん、揚げまんじゅう、あんこクリームチーズのベーグルなど、様々なあんこ菓子が行列を呼び、売り切れが続出するほどの盛況ぶりでした。その他にも民謡演奏や落語会など、あんこにピッタリな和テイストのイベントが会場のステージ上で行われお客さんの目や耳も楽しませていました。また、剣淵町は「絵本の里」として町おこしをしていることから、あんこが出てくる絵本や紙芝居の読み聞かせも行われ、こちらは小さなお客さんたちを魅了していました。

会場を盛り上げたのはお店やイベントだけではありません。壁面には町民ポラン

ティアの方々が作成したあんこにまつわる様々な展示品が飾られたのに加え、剣淵町の小豆農家さんのインタビューや町内で行われている小豆試験栽培農場の様子を紹介する記事が張り出され、訪れる人の興味を引いていました。

色々な方からのプレゼントもお祭りに花を添えてくださいました。町の障がい者福祉施設からいただいたあんこ菓子が描かれた提灯飾りは会場装飾の一部として活躍してくれました。試験栽培品種の小豆を使ったあんこの試食をご提案いただいた上川農業改良普及センターの方には、来場者があんこの食べ比べができるブースを開いてくださいました。日本豆類協会さんからは小豆や和菓子に関する冊子を提供いただいたので、会場を訪れた方に無料配布させていただきました。

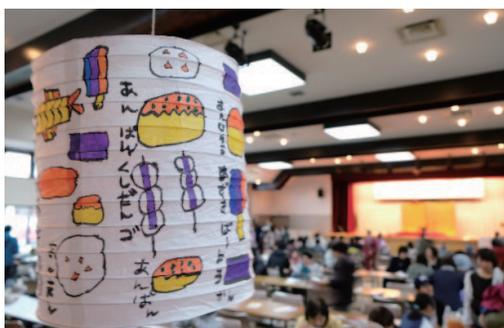
沢山の方々のご協力があり「剣淵あんこフェスティバル」は色んなお楽しみが詰まったイベントとなったのでした。

なぜ、あんこで地域おこしなのか

「剣淵あんこフェスティバル」はそもそも、町に赴任して間もない頃にいただいた



イベント当日の会場の様子



寄贈されたあんこ菓子が描かれた提灯

「町外から来た人の目線で農業ブランド化のアイデアを出してほしい」という依頼に応える形で作った企画でした。剣淵の農業について大して知識もない当時の私は「剣淵で栽培している小豆をブランド化すれば、自分が好きなあんこのお菓子が沢山食べられそうだ」という不純な動機から、あんこをテーマにしたフードフェスティバルを開催して小豆をPRして一気にブランド化することを提案しました。結局このアイデアは採用されずに終わりましたが、企画書を見た何人かの方々には好評で、「評判もまずまずだし、面白いお祭りになるのではないだろうか」というかすかな感触を得ました。

また、イベントを提案した頃から私があんこ好きだという噂が広まり、それを聞き

つけて町のあんこ好きの方々から声がかかるようになりました。主に「あそこのあんこは美味しい」とか「うちのあんこはこんなのだ」といった家庭のあんこ情報のお裾分けでしたが、お話を聞いているうちにあんこというものが地域の文化の大事な一部分なのだと感じるようになりました。そして、あんこが地域おこしの切り口になり得るだろうと考えるようになりました。

そもそも、剣淵は人口の約20%が農業従事者という町です。小豆を自分で作っているという家が何軒もあり、自前の小豆であんこやあんこ菓子を手作りするという人も珍しくない土地柄なのです。あんこは多くの人にとって家庭の味であり町の人と深くつながる食材ですから、地域を盛り上げるための起爆剤としてはもってこいではないかと思うのも自然なことでした。さらに、剣淵ではあんこが家庭の味であるからこそ老若男女を問わず多くの人々を巻き込んだ町おこしができるとも思いました。

こうして、あんこと剣淵の組み合わせの相乗効果の可能性に気付いた私は、温めていた企画を遂に実行へと移すことにしました。

開催へのハードル1 ～お店集め～

「剣淵あんこフェスティバル」を地域おこし活動の一環として提案しなおし、開催へのゴーサインと予算をもらうところまではスムーズだったのですが、そのあとは予想もしない困難の連続でした。

まずは肝心の出店店舗集めで躓きまし



イベントのために開発された揚げまんじゅう



出店9店舗が掲載されたイベントポスター

た。普通であれば「あんこ菓子の製造・販売を得意とする和菓子店に出店を依頼しよう」というのが自然な流れだと思いますが、そもそも剣淵町には和菓子店が1軒もありませんでした。近隣市町村でも洋菓子店は簡単に見つかるけれど和菓子店を見つけるのは一苦労という状況でしたので、とにかく町内外の洋菓子店や特産品開発を手掛ける団体に手当たり次第に声をかけることとなりました。ところが、普段はあんこをメインに扱わない方々に「あんこ菓子を主役に」出店してほしい」とお願いしたので断られることも少なくなく、しばらくは出店の協力者が増えない状況が続きました。それ

でも厚かましく無理なお願いをし続けていると、やがて見かねて出店を決めてくださる方や、地域貢献だからと引き受けてくださる方も現れ、なんとか最終的には9店舗に集まっていただくことができたのでした。

開催へのハードル2～町産小豆のあんこ～

出店店舗がやっと決定し、イベントの目玉を剣淵町産の小豆を使って作ったあんこのお菓子にしようとしたところ、ここでまた躓きました。あん類製造業の許可が立ちはだかったのです。

菓子製造業者が生業として販売用のあん類を製造するときは、あん類製造業の許可が必要になります（昭和33.3.19衛環発31）。普段はあんこを使うお菓子をあまり作らない多くの出店者がこの許可を持っていなかったのも、お店が剣淵町産の小豆を仕入れてあんこを作ればよいという単純な話ではなくなりました。産地にこだわるならば、剣淵町産小豆を原料とするあんこを販売してくれるあん製造業者を探して、そこからあんこを買ってもらわなくてはいけなくなったのです。しかし、剣淵町産小豆のみを使って作られるあんこはあまり製造されていないため、そもそも入手が非常に困難でした。また、イベントを開催したこの年は天候不順で小豆も他の農作物同様不作となり、剣淵町産小豆を原料とするあんこの生産自体も厳しい状況に直面していました。

また、原材料の産地を局地的に絞ってしまうと、お店の方々にはいつもとは違うあ

んこでお菓子を作る不便を強いることになるのも大きな問題となり、今回は出店者それぞれがいつも使っている北海道産小豆を原材料とするあんこでお菓子を作ってもらおうというところに落ち着きました。ここで全出店者の地元である北海道の小豆のあんこを確保することが叶い—安心したのも束の間、今度はイベントの売りをどうするか課題が残ることとなりました。

開催へのハードル3～理由と売り～

フードフェスティバルで町おこしと言うと、その土地で生産量がとても多い食べ物に焦点を当ててお祭りを開催するというのがよくある例だと思います。しかし、剣淵町ではあんこの原材料となる小豆収穫量は突出して多いわけではありません。そのため、収量ではないイベントの目玉や開催の理由が必要でしたが、あんこの原材料産地を剣淵としてイベントで小豆の地産地消を謳うのも難しくなり、とりあえずは原点に立ち返って「剣淵の人や文化と密接に関わるのがあんこだから主役をあんことする」お祭りを開催すると説明していました。しかし、なかなか伝わりませんでした。

どうやって剣淵町とあんこの関係性を分かりやすくイベントの柱として提示すればよいのか悩み始めたころ、追い打ちをかけるように町の方からこんなことを言われました。「あんこ菓子っておはぎとかお汁粉でしょ。地味だし、若い人は好きじゃないだろうし、そもそもなんであんこの？」

町の人にとってあんこが主役になり得な

いと思われていることは衝撃的でした。その後もいろいろ話を聞いていると、自前のあんこを作る町の方にとってはあんこを使って作るお菓子は昔ながらの手作り感あふれる物というイメージが強いようで、身近であるがゆえにお祭りなどのよそ行きではないということのようでした。そこで、剣淵に根付く小豆栽培からあんこ菓子作りまでの一連の地産地消の流れがどれだけ魅力的で町のPRに役立つかを伝えようと思いましたが、地元の人にとってはピンとこないようでした。

このままでは人を呼び込むだけの開催理由や魅力に欠けているとしか思えず、イベントのアピールポイントは霞むばかりに見えた時、次々と町の方々が剣淵であんこに着目する意義を教えてくださいました。

人から人へ

ある日、剣淵であんこのイベントをするとう聞きつけた町の方が「小豆のことならまずこの人に話を聞いた方がいい」と小豆を生産している農家の方をご紹介くださいました。その方にお会いして、某有名和菓子店に納める良質小豆を育てるためには惜しむことなく手間と愛情が注がれていることを教えていただいた時に、剣淵の強みが小豆の収量の多さではなく手間暇をかけて生産される小豆の質の高さであることに気がきました。さらにこの農家さんからご紹介いただいた上川農業改良普及センターの方から、剣淵町内で高品質の小豆を安定供給するための小豆の試験栽培が行われている

ことも教えていただきました。

多くの人が剣淵の小豆の美味しさを支えていることが分かってからは「様々な人の努力が培う剣淵の良質小豆をもっとアピールしたい」と思うようになり、それをイベントの開催理由として掲げることができるようになりました。

さらにここからまた人との出会いが広がって、イベントの魅力が何であるのかも明確化されていきました。

町の中で小豆農家さんを訪問したと話したところ、この農家さんの作る小豆を使って旭川市内で甘味を提供しているお店を紹介してあげるといふ人が現れ、最終的にはお店の取材まで取り付けてくださいました。取材先で食べさせていただいた宇治金時やあんみつなどのお菓子たちはどれも色鮮やか、華やかで、手作りのものとはまた違うあんこのお菓子の多様性や自由さに気付くきっかけをくれました。また、農業関係の方々の口コミのおかげで日本豆類協会さんからご提供いただけることとなった和菓子の冊子も、あんこを使ったお菓子の豊富なバラエティが人の目を引く力を持っていることに気付かせてくれました。

親切の連鎖でどんどん人の輪が広がっていく過程で、私のあんこや剣淵のイメージはどんどんと豊かなものに変化していきました。そして、これこそ「剣淵あんこフェスティバル」で体験できる面白さになるだろうと確信しました。探れば探るほど出てくるあんこと剣淵の魅力をイベントで打ち出せば、訪れる人に驚きと楽しさを与えら

れると強く感じたのです。

町の人からの支援～ボランティア～

色んな方からの助けを得てイベントの柱が固まったところで、いよいよイベントをどう見せていくかを決めていく作業となりました。ここで活躍してくださったのが、町民ボランティアの方々です。

このイベントでは「あんこが好き」「剣淵が好き」という町の方々を事前に募集し、イベントを様々な面でサポートするボランティアになっていただきました。会場を盛り上げるためのアイデア出しから当日運営まで、多岐にわたってお手伝いいただきましたが、中でもボランティアの方々の発想力が光ったのがあんこ菓子の多様性を見せる模型展示でした。

イベントの目玉の1つがバラエティに富むあんこ菓子でしたので、販売されているお菓子以外にも何か視覚的にインパクトのある仕掛けが必要でした。そこで、ボランティアの方々は色も形も違うあんこのお菓子を拡大模型にして大きく飾り出すことにしたのです。どんなお菓子を並べれば彩が豊かになるか、どう飾れば見栄えするのかなど、皆さんが考えに考え抜いて全て手作りの模型が完成しました。

他にも、あんこに関する面白いマメ知識の展示や、SNSチャット風に小豆の栄養を紹介する展示など、ボランティアの方々の創意工夫は各所で光りました。

こういった方々の助けも加わりお祭りを盛り上げる要素や内容が充実していった



町民ボランティアの手によるあんこのお菓子模型「剣淵あんこフェスティバル」は、紆余曲折を経ていよいよ本番を迎えることができましたのです。

予想以上の反響

たくさんの方の想いが詰まった「剣淵あんこフェスティバル」は多くの方のご協力のおかげで無事に閉幕まで辿り着きました。そこに至るまでも至ってからも、本当に色々な方から様々な反響をいただき、主催者としては驚きの連続でした。

まずびっくりしたのはメディアの反応とそこからの広がりでした。今までにないタイプの催し物だったことから新聞やラジオなどで取り上げていただき、「離れて住む父からあんこ好きの私にこのイベントの一報が入った」と教えてくださる方や、噂を聞きつけて遠方から駆けつけてくださる方もいました。口コミがさらに広がって「お気に入りのラジオパーソナリティがあんこ好きだと話していたからこのイベントのことを教えてあげていたよ」という方も現れるなど、他にも予想外の嬉しい反応がしばらく続きました。

イベントが終わってからは、「あんこの

お祭り行ったよ」とか「町外からも人がたくさん来ていたみたいだね」と、いつもよりも多くの町の方から声をかけていただきました。次回開催を望む声も届き、中には「お菓子を買に行くのを恥ずかしがる男連中でも行きやすいお祭りになってくれたら行くからね」と言ってくださる方もいました。

こんなに多くの声を受け取ることができたのも、あんこに加えて剣淵の人や土地に人を呼び寄せる魅力があったからだったと改めて感じます。きっと、剣淵ではあんこや小豆に限らず何か町と深く関わるキーワードを見つければ、今回のように町の人を中心に「こんな人がある」「こんなこともある」と親切の輪が広がっていった大きな動きにつながっていくでしょう。そして、それが人々の目に魅力的に映るようになり、人を引き寄せてくれるでしょう。

イベントを振り返って今、私が味わったような面白くて貴重な経験を多くの町の人にも体験してほしいと思っています。剣淵という土地で人と人が連鎖して生まれるうねりの凄さを実感し、その連動力をいかす様々な方法を町の方に生み出してほしいと願っています。町にきっとまだ埋まっている色々な魅力を掘り起こすのも磨き上げるのも、一番上手なのは町をよく知る町の人であるはずだからです。人とのつながりを大事にし町を大切に作る剣淵の人々なら、きっと素晴らしい町の魅力再発掘ができると思っています。